日本的自己の構造——下位様態と世代差——

奈良大学 高田利武 ・ 西東京科学大学 松本芳之

The structure of self in Japanese culture: Aspects and age differences

Toshitake Takata (*Department of Sociology, Nara University, Misasagi-cho, Nara 631*) and Yoshiyuki Matsumoto (*Faculty of Science and Engineering, Nishi-Tokyo University, Uenohara-machi, Kitatsuru-gun, Yamanashi 409-01*)

A questionnaire was administered to college students and adult members of society to tap the structure and content of self that are characteristic of Japanese culture. The items measured some of the constructs that presumably characterize self in Japanese culture: namely, "amae" (Doi, 1971), "Japanese ego" (Minami, 1983), and "Kanjin-shugi" (Hamaguchi, 1982). Factor analysis found eight factors, which were classified into two aspects: social and individualistic. These two aspects both included universal and culture-specific factors, and the universal factors appeared to correspond fairly well to Markus and Kitayama's (1991) "interdependent and independent construals of the self". College students see more importance in the social aspects of the self than adults in both universal and culture-specific factors. On the individualistic side, however, they rated themselves as being less independent in the universal factors, but more exclusively egocentric in the other factors. The findings were discussed in terms of the development of self of young adults in Japan.

Key words: self, Japanese culture, independent self, interdependent self, age differences.

日本人と西欧人で自己の構造や内容が異なるという可能性は、これまで多く指摘されてきた。いわゆる日本人論の中で、甘え（土井，1971），間人主義（浜口，1982），日本の自我（南，1983）等の概念は，日本文化における自己のあり方について多くの示唆を含んでいる。日本人の自己の特徴として，これらの概念が共通して指摘することは，自他の区分が曖昧で，独立主体としての“個”の意識が弱く，自己意識の内容が周囲の他者に強く規定されるという点であろう（高田・丹野・渡辺，1987）。

しかしながら，従来の論議はややもすると，日本と西欧における自己のあり方を互いに異質なものとし，単なる質的分類に終始する嫌いがあった。また，“日本的自己”が果たして日本文化に特有であるかの検討も等閑に付されがちであった¹。更には，“自己”のような概念自体が西欧起源であるとして，これを排する指摘すらある（浜口，1982）。共通の枠組みで彼我の自己のあり方をとらえ，相互の関係，あるいは，各々の中での個人差や形成の過程について考察する観点に乏しかったと言える。

これに関して，Markus & Kitayama (1991) は独立

的自己理解（independent construal of self：個人は他者から分離しており，他者から独立し独自性を主張することが必要だという考え）と，相互依存的自己理解（interdependent construal of self：個人は互いに結びついていて個別的ではなく，さまざまな人間関係の一部になりきることが大切だとする考え）の区分を提唱している。彼らは，前者が西欧文化，後者が日本をはじめアジアの文化に典型的であるとする。同時に，両者の関係を考察し，各々の文化の中でも非典型的な自己理解が優位な下位文化や個人が存在することも示唆している。今後の自己の文化差研究においては，こうした視点が必要であろう。

他方，伊藤（1993）は自己概念が形成される際の基準として，個人志向性（individual orientedness：自分自身の内的基準への志向性）と社会志向性（social orientedness：他者あるいは社会の規範への志向性）があることを指摘している。これらは，適応的な人格形成の二つの側面である個性化と社会化に対応する。従って，二つの志向性の区別は，個性的存在であると同時に社会的存在であるという人間存在の両面性（梶田，1988）に即した，極めて一般的な概念であると言える。山本（1989）もまた，同様の観点から自己の両2面性を指摘している。

このような観点から見ると，Markus & Kitayama (1991) の言う独立的自己理解と相互依存的自己理解

¹ 本稿での“日本的自己”の用語は，従来そのように指摘され実際に日本人に該当するという意味で用い，それが日本文化に固有であることは意味しない。

は各々個人志向性と社会志向性に対応する、一般的・普遍的区分と言えよう。しかし、従来から論じられてきた日本の自己の特質は、自己の個性的側面と社会的側面という、普遍的性質の重みの違いのみで説明できるのであろうか。二つの側面の各々において、彼女らが指摘するような普遍的部分とは次元を異にする何らかの特殊的部分を含む可能性はないであろうか。この点は検討を必要とする。

更に、日本文化における自己の特質を十全に把握するには、単に自己の特質を記述するだけではなく、自己の形成過程を検討する必要がある。例えば、高田(1993)は、日本人青年が日本人成人やアメリカ人青年よりも、自己概念形成の手段として周囲の他者との比較を多用し、しかもその傾向は相互依存的自己理解が優勢な者に著しいことを見出している。これは、自己概念を形成する際に専ら他者を参照する方途を用いることが、他者志向的、社会志向的な自己の特質を形成・強化してゆく過程と密接に関連することを示唆するものである。

本研究は以上の観点に立ち、日本的自己の特質を質問紙調査を通じて、二つの点から検討することを目的とする。第1に、前述の三つの概念(土居, 1971; 浜口, 1982; 南, 1983)を実証的に吟味する。これらの概念の妥当性や関連性を検討した試みはいくつか存在するが(藤原・黒川, 1981; 加藤, 1981; 田崎, 1979)、日本文化における自己の様態という見地から整理したものは乏しい。そこで、これらの著作が指摘する日本人の思考や行動の特徴が自己概念という点でどのような因子に集約されるか、すなわち、どのような下位様態から構成されるかを確かめる。

第2に、日本的自己の形成過程についての示唆を得るために、年齢あるいは世代差を取り上げ、青年と成人の差を検討する。自己の形成・発達過程を考えると、青年は自己再構成の時期にあり、価値観の形成や社会的役割の習得を主体的に行いつつ自分らしきを作り上げる(Ausbel, Montemayor, & Svojar, 1977)。従って、青年にとって日本的自己の特徴は改めて選び取る一つの基準としての意味をもち、成人とはとらえ方が異なると考えられる。そこで、自己の特徴について青年と成人に違いがあるか否かを検討する。

なお、児童期から成人期への過渡期である青年期の年齢範囲を明確に規定するのは困難であるが、ここでは12歳前後からの約10年間を青年期としてとらえる一般的見解に従い、青年後期にあたる大学生に焦点をあてた。

方 法

調査対象者 青年群(平均年齢20.3歳)は地方国立大学生141名(男性64名、女性77名)、成人群(平均年齢46.7歳)は30歳以上の地方公務員・医

師・看護婦を対象とする174名(男性80名、女性94名)である。欠損値を含む者を除外した最終的分析対象者数はTable 2に示す。講義時間と研修の席上で一斉に質問紙を配布し回答を求めた。

質問項目の構成 四つの下位項目群から構成される合計54項目からなる。“甘え”(15項目)と“日本的自我”(15項目)については、土居(1971)および南(1983)から日本人の自己の特徴とされる行動特性について言及している部分を抜き出して、整理したものである。前者については“自他の未分化”、“ウチ・ソトの区分”、“集団への埋没”、後者については“自我不確実感”を反映した“集団我の形成”、“自我の位置づけへの固執”、“定型化と完全主義”、“多元性と融通性”を示す内容を含み、“ぴったり当てはまる”(7)から“全く当てはまらない”(1)の7段階評定を求めた。また、“間人主義”(12項目)、“個人主義”(12項目)は浜口(1982)によった。これらは“相互依存-自己中心”、“相互信頼-自己依拠”、“対人関係の本質視-手段視”の程度を、“非常に賛成”(7)から“非常に反対”(1)の7段階評定するものである。“個人主義”は、日本的自己の特徴と対置される自己のあり方を現している。しかし、日本的自己の特徴を独立的自己理解から対比的にとらえる目的で、ここに含めた。具体的内容はTable 1を参照されたい。

結 果

項目分析と全体的傾向 まず、下位項目群の内的整合性を確認するために項目分析を行った。四つの下位項目群ごとに合計点を求め、その上位群・下位群(各27%)について、項目ごとに平均値を比較した(t 検定両側5%)。その結果、有意差のない3項目(“日本的自我”1項目、“個人主義”2項目)を除外し、残り51項目を以下の分析の対象とした。アルファ係数は、“甘え”(α=.83)、“日本的自我”(α=.78)、“間人主義”(α=.86)、“個人主義”(α=.74)であった。次いで、下位項目群全体に対する年齢と性別の影響を評価するために、下位項目群ごとに年齢・性別の平均値を求め、多変量分散分析を行った。その結果、年齢($F(4, 272) = 17.42, p < .01$)、性($F(4, 272) = 3.40, p < .01$)、交互作用($F(4, 272) = 6.89, p < .01$)のいずれもが有意で、年齢の主効果が最も大きかった。従って、年齢を主たる検討要因とする本研究の企図は妥当であると言えよう。

自己の構造の年齢差 成人群と青年群の因子構造の類似性を見るために、ターゲット分析(Levine, 1977 柳井・新田訳, 1984)を行った。まず、年齢群別に全項目を因子分析し(主因子法、バリマックス回転)、各々6因子を求めた。その分散説明率は、青年群で35.2%、成人群で48.0%であった。次いで、質問項目の相互依存関係を年齢群間で比較するために、成人群

Table 1
質問項目の概要と因子分析結果

第1 因子（分け隔てのない親和性：16.4%） ^{a)}	
・社会生活ではお互いに相手の立場に立つことが必要だ。	(.88：間人主義) ^{b)}
・“人は情け”と言うように相手への思いやりが大切だ。	(.87：間人主義)
・役立つかどうかより、付き合い自体を大切にしたい。	(.74：間人主義)
・親身に助け合わなければ社会生活は成り立たない。	(.73：間人主義)
・親しく付き合える人がいないと、生活が味気なくなる。	(.71：間人主義)
・事を決める場合、身近な人の意向にも配慮すべきだ。	(.67：間人主義)
・利害をはなれて人と付き合うことは楽しい。	(.63：間人主義)
・家族の一員に起きた問題は、全体にかかわると感じる。	(.63：日本の自我)
・知らぬ土地では人目をはばからず、勝手に振る舞う。	(-.50：甘え)
・知人の場合と違い、見知らぬ者には傍若無人になる。	(-.43：甘え)
・相手を直接非難できないが、匿名でならできる。	(-.42：日本の自我)
第2 因子（身近な他者への配慮：11.3%）	
・慣例に従い型どおりに行動していれば安心である。	(.66：日本の自我)
・対人関係を考えて、本音よりもたてまを優先させる。	(.65：日本の自我)
・単独行動は不安なので、集団行動の方が好きである。	(.57：甘え)
・馴れない他人と会う際、乳児のようにその人を避ける。	(.50：甘え)
・家では威張っているが、外では小さくなってしまう。	(.49：甘え)
・個人では控え目だが、集団では案外積極的になる。	(.49：日本の自我)
・何かをするとき、事前に力不足を強調し、弁解をする。	(.47：甘え)
・1人ではできないことも、集団であればやれる。	(.47：甘え)
・他人の好意には恐縮するが、身内には平気でいられる。	(.46：甘え)
・身内にはわがままだが、外では好人物で通っている。	(.45：甘え)
・親しい間柄では、好意への感謝を言葉にしない。	(.45：甘え)
・物事を決定するときは全員一致にしたい。	(.45：甘え)
・知らぬ土地では人目をはばからず、勝手に振る舞う。	(.42：甘え)
・家族内など親しい関係では背信行為を重大視しない。	(.42：甘え)
第3 因子（個人の自立：5.1%）	
・何事によらず自分のことは自分自身の力でやるべきだ。	(.85：個人主義)
・自分をしっかりもたなければ世渡りはできない。	(.83：個人主義)
・人の生活は、他人からむやみに干渉されるべきでない。	(.81：個人主義)
・個人の権利は、何としても守らなくてはならない。	(.77：個人主義)
・社会生活では、互いに意志をはっきり言う必要がある。	(.67：個人主義)
第4 因子（他者評価への懸念：3.4%）	
・他人の視線が気になる。	(.87：日本の自我)
・“人がどう思うか”といった意識が強く働く。	(.80：日本の自我)
・結果に不安を抱いて、何かを実行できないことがある。	(.58：日本の自我)
・自分と他者の間の地位や相対的關係が気になる。	(.53：日本の自我)
第5 因子（他者への信頼感：2.9%）	
・困ったときにも、だれか助けてくれるものだ。	(.57：間人主義)
・自分をさらけ出した方が、相手とうまくやっていける。	(.51：間人主義)
・自分の行動には、相手もきっと応えてくれる。	(.48：間人主義)
・一度知り合いになった人との縁は、簡単にきれない。	(.45：間人主義)
・心から詫げれば和解できると考える。	(.44：甘え)

Table 1
(つづき)

第6因子 (排他的な利己主義: 2.2%)

- ・人間は自分のことしか考えない。 (.74: 個人主義)
- ・他人の言うことは、簡単に信じられるものではない。 (.51: 個人主義)
- ・他人とうまくやるのも、我が身が大切だからだ。 (.46: 個人主義)
- ・必要がなければ、社交的な会合に出ようとは思わない。 (.42: 個人主義)

第7因子 (他者評価への防御姿勢: 2.0%)

- ・だれもがやっているなら、たとえ悪いことでもやれる。 (.53: 日本的自我)
- ・曖昧な表現を使って、本心を語らないことがある。 (.44: 日本的自我)
- ・何か失敗したときは、笑われる前に自分から笑う。 (.43: 日本的自我)

a) %は寄与率, b) 因子負荷量と出典. なお, 各項目は該当出典の概念を構成する一部であり, その概念全体を意味するものではない.

の因子負荷行列をターゲット行列として, 青年群の因子負荷行列をそれと最も一致するように回転 (Ahmavaraa 法) させた. 全体的な適合度を示す三つの指標は, $CC = .77$, $r = .74$, $RMS = .18$ であり, 両者の因子構造は個別の分析を要するほど異なっていないと判断できる².

日本的自己の下位様態 そこで, 両群を一括して因子分析 (主因子法, パリマックス回転) を行い, 分散説明率 43.3% で 7 因子を得た. 結果は Table 1 に示した. 第1因子は, “ウチ・ソト” を区別しない相互援助や人付き合いの大切さを強調した “分け隔てのない親和性”, 第2因子は, 交渉頻度の高い他者との関係を穏便にすます気配りを主とする “身近な他者への配慮”, 第3因子は, 他者と自己を峻別する “個人の自立”, 第4因子は, 他者の目を意識する “他者評価への懸念”, 第5因子は, 他者に対するいわば無条件の依存を含意する “他者への信頼感”, 第6因子は, 他者を排除し自分の利益のみを重視する “排他的な自分本位”, 第7因子は, 他者の評価を慮った上で自分の行為を決めようとする “他者評価への防御姿勢” である³.

このうち第1, 2, 4, 5, 7 の各因子は, “甘え”, “間人主義”, “日本的自我” に属する項目から構成されてお

り, 日本的自己の下位様態と解される. これらは他者との関係を配慮・重視する点で自己の社会的側面に対応する. このうち, 第1, 4, 5 因子は Markus & Kitayama (1991) の説述におおむね対応している. しかし, 第2因子は配慮が同質的な身近な者だけに限定されており, 第7因子は自己防御的な色彩が強く, 彼女らの指摘と必ずしも相同ではない. 従って, いわゆる日本的自己は, 相互依存的自己理解に対応した普遍的部分とともに, 関心をもつ他者の限定, 自己防衛的姿勢という特殊的部分を含むと言える.

他方, 第3, 6 因子は “個人主義” に属する項目群から構成されており, 個性的側面に対応する. そのうち個人の自立を強調する第3因子は, 独立的自己理解にほぼ即している. しかし, 第6因子は排他的な我利追求を意味しており, Markus & Kitayama (1991) の指摘とやや異質である. すなわち, 個性的側面も, 独立的自己理解に対応した普遍的部分とともに排他的な我利追求という特殊的部分を含むと言える.

各側面における年齢差 因子負荷量の絶対値が .40 以上の項目を選び, 因子ごとに個人別の粗点の平均値を求め, 各因子の得点とした. 負荷量が負のときは粗点値を逆転させた. 性と年齢群別の平均値を Table 2 に示す. 7 因子全体への年齢と性の影響を比較するため, これを多変量分散分析した結果, 年齢 ($F(7, 269) = 21.68, p < .01$), 性 ($F(7, 269) = 3.11, p < .01$), 交互作用 ($F(7, 269) = 4.63, p < .01$) のいずれもが有意であった. そこで, 各因子ごとに分散分析と単純主効果の検定を行い, 自己の2側面別に大要を整理した.

自己の社会的側面について, 第1因子 (分け隔てのない親和性) では, 全群が肯定している. 但し, 年齢の主効果 ($F(1, 275) = 13.09, p < .01$) と交互作用 ($F(1, 275) = 6.47, p < .05$) が有意であり, 成人よりも青年の肯定が強く, 成人女性の肯定度が最も弱かった. 第2因子 (身近な他者への配慮) では, 全群とも

² ターゲット分析の比較統計量は, RMS (平均平方偏差の平方根), CC (一致係数), r (ピアソンの積率相関係数), S (サリエント類似性指数) の4種である. 数値範囲は, CC, r, S の3種は -1 から 1 までの値をとる. 数値の意味はおおよそ相関係数に準じたものである. RMS は, 0 から 2 までの値をとり, 1 に近いほど関連がないことを意味する.

³ この三つの概念は, 互いに独立し重複しないという見解がある (加藤, 1981). しかし, 本研究では, “分け隔てのない親和性” のように, 各概念が含意する自己の側面が混在する因子が得られた. このことは, 三つの概念が認知構造の異なる次元に対応するような, 対人関係の独自の側面を取り上げているわけではないことを示唆する.

Table 2
各側面の年齢・男女別平均値^{a)}

因子	1	社会的側面				個性的側面	
		2	4	5	7	3	6
青年 男性	5.45** (.50)	3.71** (.83)	4.63 ^a ** (1.22)	4.30** (.86)	4.55 ^a ** (.99)	3.54* (1.39)	4.25 ^a * (.98)
女性	5.63 ^b ** (.47)	3.68** (.67)	4.79 ^b ** (.93)	4.42 ^b ** (.74)	4.77 ^b ** (.96)	3.38 ^b ** (1.29)	4.20 (.88)
成人 男性	5.36 ^c ** (.83)	3.65** (.80)	4.08 ^a (1.27)	4.40 ^c ** (.86)	3.57 ^a ** (1.01)	3.89 ^c (1.45)	3.85 ^a (.85)
女性	4.94 ^b ^c ** (1.52)	3.41** (1.13)	3.96 ^b (1.30)	3.96 ^b ^c (.80)	3.82 ^b (1.02)	4.85 ^b ^c ** (1.38)	4.06 (.97)

^{a)} 数字に付したアルファベットは、2要因分散分析の単純主効果検定において、^a は男性の年齢差、^b は女性の年齢差、^c は成人の性差について、 $p < .05$ で有意差が得られた比較である。また、* は $p < .05$ 、** は $p < .01$ で中立点(4)から異なることを示す。()内はSDである。

項目内容を否定している。但し、年齢の主効果について周辺の有意差が見られ ($F(1, 275) = 2.75, p < .10$)、青年は成人より否定する程度が弱い。第4因子(他者評価への懸念)では、年齢 ($F(1, 275) = 24.64, p < .01$) のみが有意であった。成人は中立であるのに対し、青年は肯定している。第5因子(他者への信頼感)では、年齢 ($F(1, 275) = 4.52, p < .05$)、交互作用 ($F(1, 275) = 8.27, p < .01$) が有意であった。青年男女と成人男性が肯定的であるのに対し、成人女性は中立である。第7因子(他者評価への防御姿勢)では、年齢 ($F(1, 275) = 65.21, p < .01$)、性 ($F(1, 275) = 4.00, p < .05$) の主効果が有意であった。なかんずく、年齢差が顕著で、青年は男女とも肯定しているのに対し、成人男性が否定、成人女性が中立である。

自己の個性的側面では、第3因子(個人の自立)で年齢 ($F(1, 275) = 33.77, p < .01$)、性 ($F(1, 275) = 6.63, p < .05$)、交互作用 ($F(1, 275) = 11.61, p < .01$) がすべて有意であった。青年は男女とも否定的であるのに対し、成人男性は中立で、成人女性は肯定している。第6因子(排他的な自分本位)では、年齢 ($F(1, 275) = 5.28, p < .05$) のみ有意で、成人は中立であるのに対し、青年は肯定している。

以上、年齢差は全因子で顕著に見られるが、性差は大部分が交互作用として関与している。その場合の単純主効果を見ると、成人女性を含む比較のみが有意であった。これは成人女性群の特異性を示唆している。

考 察

本研究の主たる結果は、(1) “甘え”、“間人主義”、“日本の自我”の概念から示唆されるいわゆる日本の自己は、いくつかの下位様態から構成される、(2) いずれの下位様態にも明らかな世代差が存在する、の2点に要約できる。

(1) に関しては、相互依存的自己理解に即した普遍的部分だけでなく、特殊的部分が下位様態には含まれている。質問項目の対応を見ると、“間人主義”は普遍的部分(第1, 5因子)のみにかかわるのに対し、“甘え”、“日本の自我”は普遍的部分(第1, 2, 5因子)と特殊的部分(第2, 7因子)の双方に関与している。すなわち、“甘え”と“日本の自我”の概念は、Markus & Kitayama (1991) の概念化を超える部分を含んでいる。更に、“個人主義”についても独立的自己理解に対応した普遍的部分と同時に、特殊的部分が見出された。

日本人の自己のあり方を示唆する議論は、今回とりあげた三つに限られない。また、7因子の説明率は必ずしも高くはなく、その意味で他の下位様態が存在する可能性もある。しかしながら、上記の結果から考えると、いわゆる日本の自己は自己の社会的側面と個性的側面の次元にかかわる普遍的な相互依存的-独立的自己理解に限定されない特殊的部分を含む可能性がある。この特殊的部分が果たして日本文化に特徴的であるか否かは、今後の検討課題である。

同時に、自己の社会的側面と個性的側面との関係を更に考慮する必要があるだろう。Markus & Kitayama (1991) は、一方の側面が優勢であれば他方は微弱になると指摘している。本研究における青年と成人男性の結果は、日本文化では相互依存的自己理解が独立的自己理解を圧倒する傾向があることを示唆しており、その意味で彼らの指摘は妥当である。他方、相互依存的自己理解と独立的自己理解の双方が同時に優勢である個人(高田, 1992)は、自己の2側面を統合し成熟した人格を形成する過程にあると考えることもできる(山本, 1989)。成人は一般に相互依存的と独立的の双方の自己理解を是認する傾向にあり、両者を統合して安定した自己を形成しているとも考えられよう。しか

し、自己の社会的側面と個性的側面が同時に優勢であることは、双方が葛藤し例えば対人恐怖傾向のような不適応の背景となることもあり得る（高田，1981）。これも今後の検討を必要とする。

(2)に関しては、普遍的部分と特殊的部分の双方とも、青年は成人より自己の社会的側面を是認する程度が強い。それがとりわけ著しいのは、“他者評価への懸念”と“他者評価への防御姿勢”の要因である。これは行為の決定において極めて他者依存的事であることを意味する。但し、依存する他者は接触頻度の高い同質的な他者に限られている（“身近な他者への配慮”）。一方、個性的側面では、普遍的部分を肯定する程度が弱いのに（“個人の自立”）、特殊的部分である我利追求の姿勢が顕著である（“排他的な自分本位”）。従って、青年は成人より日本的自己の特質を強く現していることになる。これは、長期の社会的適応を経た成人は、文化・社会的特徴とされる価値や規範をより体现しているという、一般的通念と異なる。

一般に、青年期においては他者からの評価を気にする他者の眼差し意識が強く（梶田，1988）、他者を手がかりとして自己概念を形成してゆく傾向が顕著である（高田，1993）。その一方で、青年期における自己再構成は、本来、他者とは異なる個としての自分自身の存在に気づく過程でもある（Ausbel et al., 1977）。ところが本研究の場合、青年は他者への関心や依存を過大なほど是認してはいても、その範囲を特定の他者に限定し、利己的側面以外に自分自身を個として認識する傾向に乏しかった。これらの特徴は、青年が自己を再構成してゆく際に、個としての存在に気づくことよりも、現行の日本の社会システムに適合した自己のあり方を、積極的に取り込もうとしている可能性を示唆する。他方、成人女性群が青年と対照的な傾向を示しているのは、彼女らが主に有職婦人で、現行社会で不利な立場に置かれがちであるという状況に由来する可能性がある。

このような青年群の傾向は、“…日本の青年の分離個体化においては分離の達成のみが重要な課題で個体化の確立という側面はあまり重要な位置を占めていない…”（高橋，1989，p. 10）という知見と一致する。また、青年期に自立・個別化志向をある段階で切り上げ、最終的な調和の方向を早くから目指す“日本的バイパス”の現象（梶田，1988）とも、極めて近い位置にある。すなわち、西平（1964）の指摘する世代性（特定の社会における一定の時代・世代に特有で、発達的には特殊な行動の様式）が、青年性（発達の過程で必然的に生じ、歴史・文化を超えた普遍性をもつ行動の様式）を圧倒する傾向を示していると言えるが、このような日本文化における青年期の自己再構成の特質は、なお検討の余地があろう。

以上、青年期の自己再構成といわゆる日本的自己と

の関係について論じ、自己の文化差研究に自己の形成・発達過程の視点を導入することの有効性を示唆した。もとよりこれらの論議は、現段階では調査結果に即した一つの推論にすぎない。日本文化における自己形成の過程を、更に実証的に分析検討することが今後の課題である。

引用文献

- Ausbel, D. P., Montemayor, R., & Svojiar, P. N. 1977 *Theory and problems of adolescent development*. 2nd ed. New York: Grune and Stratton.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 藤原武弘・黒川正流 1981 対人関係における「甘え」についての実証的研究 実験社会心理学研究, 21, 53-62.
- 浜口恵俊 1982 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 64, 115-122.
- 梶田勲一 1988 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- 加藤義明 1981 日本的人間関係論の分析 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 634-635.
- レビン M. S. 柳井晴夫・新田裕史(訳) 1984 多変量相関分析の方法 朝倉書店
- (Levine, M. S. 1977 *Canonical analysis and factor comparison*. Beverly Hills: Sage.)
- Markus, H., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 南 博 1983 日本の自我 岩波書店
- 西平直喜 1964 青年の心理学的特性の形成機構——方法論的視点から—— 心理学評論, 8, 102-111.
- 田崎篤郎 1979 日本の対人関係 年報社会心理学, 20, 113-131.
- 高橋藏人 1989 青年期における分離個体化に関する研究——質問紙調査による考察—— 心理臨床学研究, 7, 4-14.
- 高田利武 1981 対人恐怖と社会的比較 年報社会心理学, 22, 201-218.
- 高田利武 1992 独立的・相互依存的自己と自尊感情および社会的比較 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 109-110.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較——日本人大学生にみられる特徴—— 教育心理学研究, 41, 339-348.
- 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲 1987 自己形成の心理学 川島書店
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究——青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討—— 教育心理学研究, 37, 120-127.

——1994. 6. 27 受稿, 1995. 1. 21 受理——